

### 36 手漉和紙製造技法 川東136番地

徳島県の和紙は歴史が古く、大昔、天日鷲命が川田で紙をすかれたといわれる。奈良時代には、朝廷に和紙を献上したという記録が残っている。また、明治23年(1890)には、パリで開かれた万国博覧会に、川田の紙が出品された。

和紙を造るには、原料のコウゾと、にべ(紙に粘りを持たせるためのもので、トロロアオイ等の木から作られる)と清水がいる。川田は、その三大条件を備えていたのである。

昔、高越山は、コウゾの木が多いところから「コウゾの山」と呼ばれ、それが転じて現在の名がついたとの説もある。また、にべにする木もたくさん生えていた。そして、川田川の水は、紙すきに最適の水であった。

明治時代になると、文明開化とともに紙の消費は一段と高まり県下では、川田地区を中心として、すき屋が250軒を数え、阿波紙は全国的にその名声が高かった。

しかし、その後の洋紙製造技術の進歩と、それにとまなう機械すき和紙の隆盛により手すき和紙の製造もしだいに衰え、現在では川東の富士製紙企業組合(組合長藤森実)だけが、やっとその製造をつづけているに過ぎない。

その手すき技法を保存しようと、山川町は昭和44年8月に、これを民俗資料として指定し、つづいて、県は昭和45年6月に無形文化財に指定した。



手すき和紙製造〔県指定無形文化財〕



### 37 神代お宝踊り 川東136番地

川田八幡神社は、阿波の国忌部の守護神として信仰されてきたが、神代お宝踊りは、その神前で、豊年には豊年踊りとして、日照りには雨乞踊りとして行なわれてきた。

豊年踊りとしての記録は見当たらないが、東西両川田村相調子差上帳（1815）には、雨乞踊りについてくわしく記されている。それによると「この踊りは、古来京都で行なわれていたのを、数百年前に川田の者が行って伝授されたものであり、もともとは神いさめの踊りであった」とある。

雨乞いは、まず神官・僧侶が八幡神社の堂にこもって祈とうをつづけ、7日目の願結びに「立ぞろい」といって、村民は花笠、扇笠、鉢巻き、たすきがけの思い思いの姿で、かね、たいこ、ほら貝を鳴らして踊った。それから、高越山頂に登り、経塚で踊りに踊ったものである。

差上帳には、その様を「ほら貝、たいこ、かね、その他行列の道具残らず持ち出して、振り申し候。吹立て、押立て、扇をかざし、空をあほぎ立てあほぎ立て雨を乞ひ申し候」（原文のまま）と述べている。

踊りの音頭（歌詞）は、「皆一樣にお並びありて、いと鷹場にひとおどり」という入端の唄で始まり、第一雪搔から第七汐汲までがつづけられる。こうして雨が降ると、吉野川の京石の上で、お礼踊りとして、第八番お宝踊りが行なわれたのである。

明治の頃に一時衰えていたこの踊りも、大正初めに原田武一郎が再興し、現在は川東名保存会（会長藤森実）が、米倉寅夫を経て、その保存維持に努めている。

毎年10月22日、川田八幡神社祭礼には烏帽子をかぶった10余名の少年少女が、小だいを打ちながら、はやし方の音頭、拍子木に合わせて踊る姿が見られる。



神代お宝踊り〔県指定無形文化財〕



## 38 獅子舞い

獅子舞いは、毎年秋祭に豊作を感謝して行なわれているが、山崎獅子舞いと北島獅子舞いは有名で、それぞれにその伝統を誇っている。

山崎獅子舞いは、古老の言によると、約150年前に、現在の川島町唐戸から分身され、その舞い方を伝授されたものであるという。その当時は、毎年春秋の「虫追い」行事として村境で行なわれていたらしいが、現在では山崎忌部神社祭礼に神事として行なわれるようになったものである。その構成は、大だいこ1, 小だいこ2, 獅子2頭(青と赤), 打ち児3人で、そのうち大だいこを打つ児は獅子てがいと呼び、2人がかりで舞う獅子の相手となる。

北島獅子舞いは、原田義胤の説によると、「かつて、北島は山上(川辰), 京極, 極上, 森本屋などの藍商を営む分限者がいたし、また、渡船場があって旅人の往来も激しく、川田産物の集散地でもあり、多額の現金が落ちて大変豊かな所であった。獅子頭は数年毎に新調しなければならず、そのたびに多くの費用がかかる。しかし、財源の豊かな北島では、ずっと獅子舞いが伝承されてきたのである」といわれる。

また、原田好次郎は、「当時、土地の習慣として、養子は祭礼のお練りに挾箱役になるが、山上の養子がこれを嫌い、獅子を買入れて舞ったのが、その起こりである」ともいっている。

太平洋戦争以来中止されていた獅子舞いも、昭和44年に復活され、秋祭には野郷神社を中心に盛大に行われるようになった。

その構成は、小だいこ3, 獅子2頭(青と赤), 打ち児3人で、昔はその年に産まれた子の産衣を借りて衣しようにしたといわれる。



山崎獅子舞い

北島獅子舞い





### 39 盆 踊 り

盆踊りは、室町時代の末期に信仰の行事として始まり、享保年間（1716～1735）に盛んになったといわれている。

特に「中興の名主」と称された徳川8代将軍吉宗は、心中、ばくち等の流行していた乱世に、人心を改めさせるため、神社祭礼、芝居興行、相撲とともに、盆踊りを大いに奨励した。

しかし、住友家記録によると、当時の阿波では吉野川周辺の民百姓は毎年のように洪水に襲われまた、自分の作った米麦や山林の木1本も自由にできない厳しい統制のために、ずいぶん苦しい生活をし、民百姓は盆踊りに踊り狂って、その不満や怒りをぶちまけようとしたとも伝えられる。

いずれにせよ、度重なる天災に、民百姓は天神地祇の加護を願って、神霊を慰めようとして盆踊りをし、さらに時代が移るにしたがい、身近な仏事として、祖先の霊を祭る「精霊踊り」と変わったものであろう。

そして、現在では、全国的に民衆の娯楽として受けつがれている。

最近、山川町でも、寺々の境内で盆踊りが盛んに行なわれているが、踊りには、しばこみ、二つ拍子（チャラチャン）、下節、五つ拍子、山踊り、綱引き（浄瑠璃くずし）、扇子踊りの7種類があり、それぞれの音頭は、すべてテープに録音されて、川田公民館に保管されている。

今日、全国的に有名となった阿波踊りも、この盆踊りが変化し発展したものである。

笹山通れば 笹ばかり

石山通れば 石ばかり

いのしし豆食て ホーイホイホイ

このはやしことばは、もともと、盆踊りのときに踊り場へ行く道中に歌われたものであるといわれる。



盆 踊 り (宇山清人画)



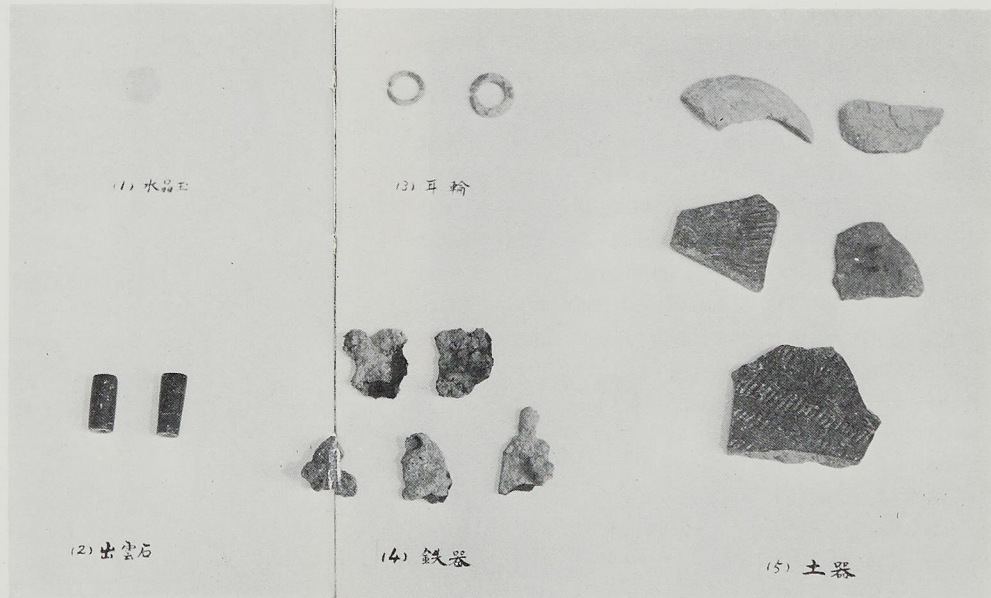
## 40 境谷古墳出土品

これらの出土品は、昭和33年山川町史編集の時、宮地「境谷古墳」で見つけたものである。この古墳は、本町古墳の中でも珍しく完全に残っているものの一つで、内部はすでに荒されていたが残土を整理して得たもので、その内容は次のとおり。

1. 水晶切り玉 1個
2. 出雲石 2個
3. 耳かざり環 2個
4. 鉄器破片 数個
5. 土師器破片 数個
6. 須恵器破片 数十個

水晶石や出雲石は首飾りであったと思うが、いずれも中に穴があけられているが、片側は太く、片側は細くなっているし、真中に穴が通っていないく、片方へずれているなど、細工がいかにも素朴で、今から1300年も前の物だとの感じがひしひしとせまる思いがする。

また、耳かざりは大小2つあり緑青が現われている。この上に銀か金の鍍があったのではないか。鉄片は鏃か、刀の破片か武具の一部であろう。土師器は須恵器より早い時代に作られた土器で、柔かく、須恵器は高温で焼上げた、固い土器で、この技術は大陸より伝わったものといわれる。



山川町の古墳は、主に東部丘陵地に多く、その数、文献に載っているものだけで百余個を数えることができるが、現存しているものは、わずか十数個にすぎない。また、出土品に至っては真に少なく、出土の記録や、言い伝えはあっても、現存しているのは境谷古墳の出土品だけが主であることは、淋しい。(古墳の項参照)

本町が忌部族発祥の地といわれるからには、それを証する古墳の所在を明らかにし、保存し、出土品を大切にすることが必要である。



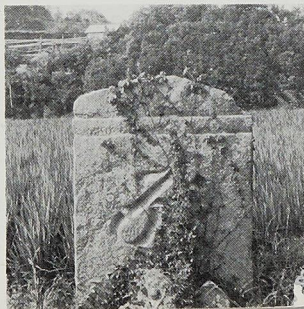
## 41 板 碑

板碑（青石塔婆）は墓碑の一種であって、鎌倉時代から室町時代に掛けて多く作られている。本県は全国的に見て、極めてその数の多いことで有名である。その理由は、その材料である緑泥片岩の産地であったからであると思われる。

写真のように、頭部は三角形で、その下に二条の切り込みがあり、その下に梵字、仏像を刻み、下に銘文を記してあるのが普通である。その梵字は、弥陀、または弥陀三尊を現わしたものが最も多い。他に大日・薬師・釈迦三尊・不動の種字とか光明真言を現わしたものの、阿弥陀来迎・地藏の像を刻んだものなどがある。1 葎ぐらいの高さが多いが、まれに3 葎を越えるものもある。

本町のは、40 葎か1 葎60 葎ぐらいまでである。このような板碑を調べることによって、それが作られた頃の人々が何を信仰していたかがわかる。さらに大切なのは、特に板碑が多く建てられた南北朝時代(1337~1392)に、その地が南朝・北朝いずれの勢力範囲にあったかがわかることである。東川田土井の内(翁喜台)の板碑には、延元3年(1338)とあるが、これは南朝の年号である。

また、西川田大坊跡のものには貞治2年10月(1363)とあり、北朝の年号である。その他、南北朝合一(1392)以後のものもあるが、興味深いのは、南北朝時代の年号の記されたものである。しかし、緑泥片岩はその岩石の性質上風化しやすく、600年~700年前に作られたものなので、風雨のため磨滅し、判読で



きない場合が多い。中には、肉眼では判然としなくても、拓本にとってみれば、判読できる場合がある。数百年前の歴史を物語るこのような重要な史料を大切に保存したいものである。



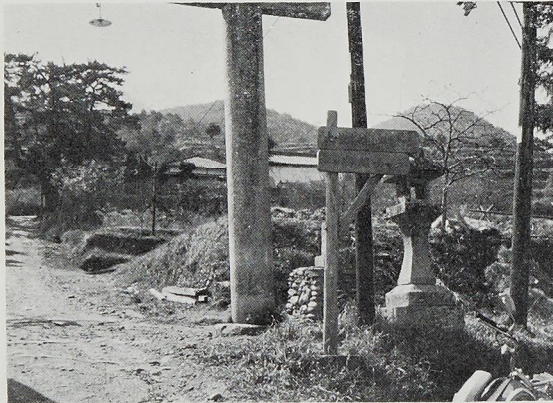
大坊跡の板碑



## 42 百万遍供養碑

井上の高越登山口学坂の鳥居から北 100 ㍍の所にある、高さ約 2 ㍍の自然石に「光明真言百万遍碑」と記された石碑が建てられている。このような石碑は町内の辻とか、寺院や庵の境内に、合わせて 17 ㍍所建てられている。

これらは、その供養塔建立地区に、それぞれ講中があったものと考えられる。これらは、真言宗の信徒が光明真言を百万遍念じた記念につくったもので、いずれも上に大日如来を意味する梵字を記し、その下に百万あるいは一百万と一を加えたものもあり、献立年月日が記されている。時代は文化・文政（1804～1829）のものが多く、稀に明治初年（1870年ごろ）のものもあるが、いず



高越登山口「学坂」

れも祈願と信仰のためのものである。

瀬詰八幡三島の「喜来名」に今も大師講と称する講中がある。はじめは講中 26 戸であったが、今では 10 戸余りとなり念仏講が続けられている。町内の多くの講中は、長い年月の間にほとんど解散してしまったものと思われるが、ここだけは講中が続けられ、毎月旧の 24 日に弘法大師の遺業をしのび、かつてはその霊をとむらいあわせて夏の土用中に悪疫流行防止の祈禱として三島の大師庵に集まって祈願をしている。

なお、三島の大師庵には長さが 7 ㍍余りで、それぞれの球の直径が 3 ㍍もある大珠数がある。この珠数をくるのは、旧正月の 24 日と旧 7 月 24 日の 2 回だけで、講中の人やその子供たちも集まって、念仏を唱えながらくっていくのである。

この講中の名称は「瀬詰喜来大師講」と呼んでおり、将来も続くことと思われる。



百万遍供養碑



### 43 庚 申 塔

庚申塔は一般に「おこうしんさん」といわれるもので、町内の道路端に、写真のような石塔が見かけられる。現在ではお祭りをしているところは非常に少なく、山崎の中須賀の庚申さんの外に2、3ヵ所があるだけである。庚申の日に部落内で輪番でだんごをお供えして、お祭りを行なっている。昔は、他の庚申さんも、こんなお祭りをしていたようである。

庚申信仰の起源は、中国の道教とされている。十干十二支（えと）の庚申の日にあたる日の禁忌行事を中心とする信仰である。

人間の体内には3匹の虫がひそんでおり、庚申の夜人が眠っている間に、抜け出して天帝のもとにのぼって、その人の罪やあやまちを告げて命を取らせる。だから、その夜は眠らずに身を慎んで過ごさねばならないとし、そのための禁忌を道教では守庚申といった。わか国に伝わって日本独特の変わりかたをし、徹夜と慎みの行事は残ったが、三尸虫の伝承はみられず、行事にともなう会食談笑のほうに重点が移っていった。



中須賀の庚申塔

道教の守庚申はわか国にはいつて庚申待となり「庚申さま」という信仰対象を祭り、礼拝する形のものとなり、その行事にともななって交歓の機会ともなったのである。「庚申さま」の本体もさまざまで、青面金剛菩薩とするのが一般であるが、阿弥陀仏・観世音菩薩・大日如来・地藏菩薩・不動明王・帝釈天・猿田彦・道祖神などの神仏から「申」の見立て生類であるサルにまで及ぶ。これらの神仏はみな現世利益をもたらすものとされ、道教の天帝とは全然ちがった福の神の性格をもっている。

町内の庚申塔は宝暦年間(1751~1763)に多く建てられている。その数は川田28、山瀬18、川田山7、合計53である。大半は荒れたままにしてあるが、私達の祖先の人々が心のよりどころとして信仰し礼拝してきた遺物である。これらは、大切に保存したいものである。

宮島の庚申塔





## 44 五 輪 塔

町内の寺院、墓地、屋敷等に散見する五輪塔は、鎌倉時代の後半から江戸時代後半にかけて建てられたものである。

この五輪塔は墓標、供養塔、舍利塔としての意味をもっているが、地・水・火・風・空の五輪からなっている。

山分では桑内、皆瀬部落に多い。次ページ写真の五輪は西法寺の門脇にあるもので、高さが約60センチの中五輪である。

供養塔として、代表的なものをあげれば、明王院境内にある舍利宝篋印塔がある。これは「天明の大飢饉」の翌年、天明7年

(1788) 7月21日に建てられたものである。明王院第11世住職快教上人の時代に、道誉という僧が、この地の諸民の苦難を仏の慈悲によって救いたいために建立を思いついたものである。

諸方を回り、喜捨を受け、この塔が建ったが、碑文には「一切の如来に供養するの功德あり一切の聖霊を供養する功德あり一切の吉慶を満す為に、この村一切の地獄を滅す」との意味が書かれている。また、金勝寺門脇には、阿波屋善右衛門が建てたりっぱな石塔もある。

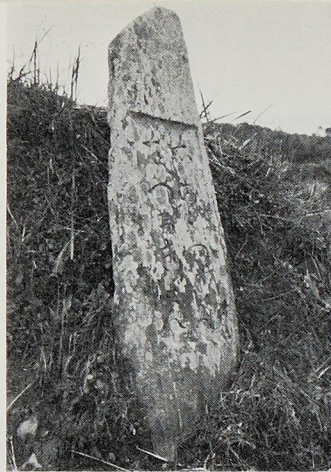


舍利宝篋印塔 (明王院境内)

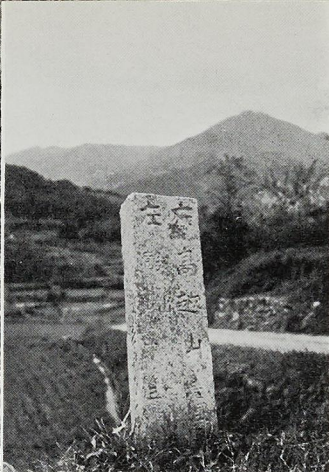
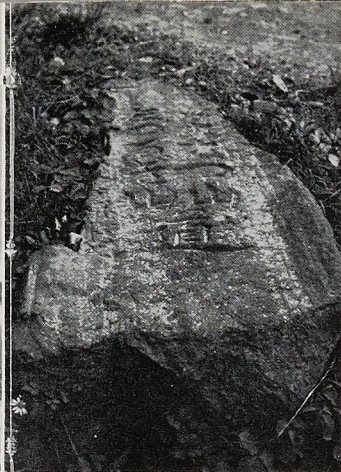
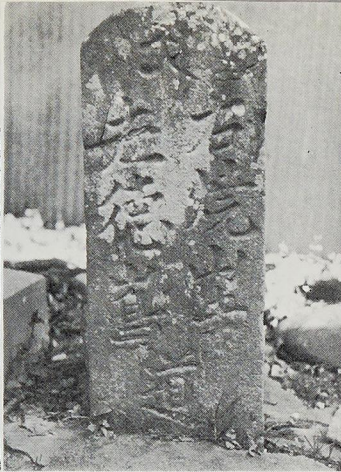


五輪塔 (西法寺門南)





道標「四国遍路道しるべ」



道標「登山道しるべ」

## 45 道 標

山崎の西久保から祇園を通り坂田を経て、川田の麦原へ通じる道の辻々に、写真のような道標（道しるべ）が数か所建てられている。祇園の坂田へ行く道と種野方面へ行く辻にあるものは、何者かによって倒されている。

現在では何の役にも立たないものであるかも知れないが、まだ道路が整備されておらず、交通機関のあまり発達していなかった頃には、なくてはならぬ大切な道しるべであったのである。

道標の文字は「右高越山」あるいは「右こをつ山」「左つぎ山」と刻んである。

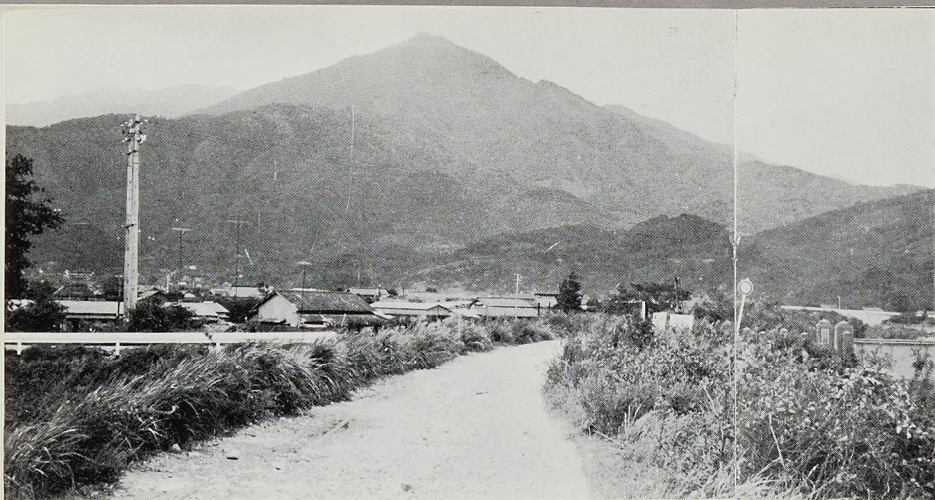
現在、つぎ山へは穴吹駅や貞光駅で下車して登山しているが鉄道が舟戸（今の川田駅の少し西寄り）までしか通じていなかった頃には、山瀬駅で下車し、徒歩で種野、中枝、中村、二戸を経

て木屋平に至り、そこからつぎ山へ登山していたのである。

その他、四国遍路の道しるべが町内に数か所建てられている。西から順を追ってみると、東市久保の三木家の北側に「左徳島」「右焼山寺」と刻まれた道標がある。次に南町の近藤医院前には「右高越山」「左焼山寺」と刻まれ、道路整備のためなかば地中に埋もれた高さ40センチぐらいの自然石の道標がある。次に横走の先山家の西側に「右へんろ道」「左こんびら道」と刻した自然石の道標がある。これらは昔の人が四国88か所詣りを徒歩でしていたことを物語っている。なお、高越山参道には、力士一本が配置したといわれる丁石が1丁ごとに建てられていたが、現在では登山者のいたずらで移動したり、消滅したりしているものもある。せめて残っているものだけでも大切にしておきたい。

これらの道標の前に立って、じっと眺めていると、もっぱら徒歩で旅をしたり、登山をしていた昔の人達の苦勞が偲ばれる。





山川中学より眺めた高越山

## 46 高 越 山

本町南西部にそびえる標高1123mの高越山は、本町最高の山であり、連峯を従えて中空にかすむ、親しみと威厳を持ったその容姿は、まさに阿波の名山としての風格を備えている。

東側は川田川で、そして西側は穴吹川でけずられたその山塊は東西に連なる山地より数百m高くそびえ、吉野川中流域の名山とたたえられ、特に北方よりの眺めは秀麗である。その頂上附近の南側には真横になったものすごい曲が見られ、これが附近の山々に比べて高越山を高くさせたものであることがわかる。また、山の所々に蛇紋岩や角せんがんの露出があり、含銅硫化鉄鉱のある銅山も地殻の大変動による断層や亀裂に沿って、内部から

現われ出たものである。この一つの高越山にも長い年月にわたる変転の跡がさざみこまれている。また、高越山の東斜面の「菰川」で製造を開始した「凍豆腐」は隆盛をきわめ、場所も奥野井方面にまで及んだ。

海拔1000mをこえる高越山は立体的な分布に幅があるので、生物の種類は極めて多い。特にブナを中心とする高越山頂上の原始林は、この程度の標高の山としては珍しいもので、その巨大なスギの林も、また太竜寺山、鶴林寺とともに見事である。この原始林は、多くの動植物の宝庫となっている。

ことに、動物ではカゲス・ミソサザイ・ヤマガラシ・シジュウガラの産卵地として保護され、その他、陸貝類やリス、ムササビが棲息する。また植物ではアワコバイモ・フクジュ草・イワギリソウ等の珍しいものも多い。

山頂には、高越神社があり天日鷲命を祭っている。少し下ると高越寺があり、今から1,300年の昔、古義真言宗の役の行者の開基で蔵王権現を本尊としている。延暦20年(802)弘法大師が28歳の時に登山し、修行した記録がある。

また、境内にある唐画、涅槃図は寺宝であり国指定重要文化財に指定されているほか、数々の寺宝を蔵し高越寺の歴史の古さと阿波における仏教の先進地であって、仏教の靈感が人々に感銘を与え、信仰を集めていたことを物語っている。

昭和36年に、県立自然公園として指定され、吉野川とともに山川町の観光地として、人々に親しまれている。



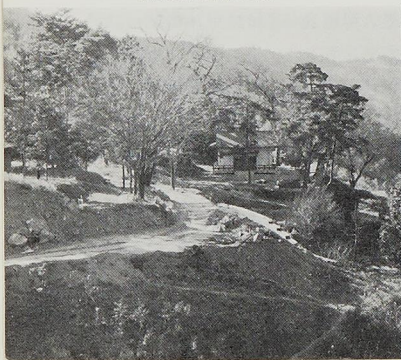
## 47 忌 部 山

山瀬駅の東南方、旧山瀬町、山崎の南側に連なる小山一帯が、忌部山と呼ばれている。苔むす 180段の石段を登りつめると、天日鷲命をまつる国幣中社忌部神社がある。

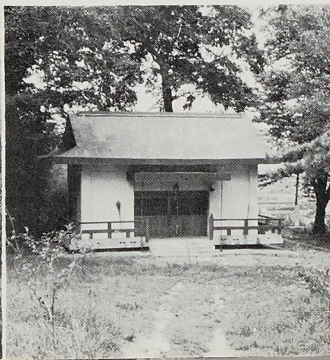
古い地名辞書によると、現在忌部山といわれる地域は「旧山崎村字大東及び学村の一部にまたがる山地」とあり、忌部山の地名は、単に世間一般に呼ばれている呼び名ではなく、地字の名称として、現在も町役場の土地台帳に明記されている。

なお、古書によると忌部神社の境内、3里四方のうちを内山、境内、3里四方の外部を外山といわれている。忌部山は、大昔、阿波の開祖、忌部氏が住みつき、川に漁し、麻を植えて開拓したいわれのある山である。この山は高燥にして地味が肥え、吉野川の氾らんの害もなく、麻の栽培に好適なこの地方に忌部族が定着し、やがて平地へ進出、開拓をすすめていったことも、もっともとうなずかれる。今でも、当時の忌部郷の名残りをとどめる遺跡・遺物や、これにともなう口碑伝説が非常に多い。なお、忌部山

現在の忌部神社付近



忌部神社



忌部山全景

頂に大きな横穴式古墳 3 個、忌部旧社地に 4、5 個の残がいを残しているが、いずれも奈良朝以前のもので、山川町にとっては、好適の史蹟の記念物である。

また、忌部山の一溪谷を「土器谷」と呼んでいるのは、上代土器製造である忌部氏が、日常使用するものや、忌部神社の祭器を作ったためであろうと思われる。

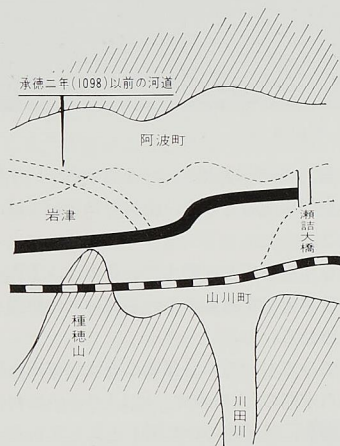
これらのことから考えてみても、この忌部郷こそは忌部氏の居住した地域とみられ、徳川末期の「大日本史」にも「今の山崎村に忌部山あり、小島の西にあり、忌部連のいた所」と記してある。また、阿波藩の編集した「阿波志」によれば「忌部山は、山崎村にあり、すなわち忌部神社の所在する所」としている。

なお、忌部山は景勝にもすぐれ、山頂よりは吉野川平野が一望のもとに見渡され、ことに東側の南北につづく平たい尾根は「岡の坊」と呼ばれ、月の名所として有名で「月見が丘」の別名がある。これらのことから、忌部山は忌部氏最初の定着の地として、郷土の歴史をたずねる上で、特筆すべき重要な山であろう。



## 48 種 穂 山

高越山の一支脈が川田駅の西方に延びて、吉野川に突き出している山を種穂山という。仁和2年(886)の吉野川の大洪水は、岩津と四国山脈を分離し、その後、承徳2年(1098)以後の河道の



変遷により、この山嶺は、吉野川を北方におし出し、ちぢめた形になり、狭窄部河中160㍍の吉野川地溝帯における最狭地となって、岩津の深淵をつくっている。

古来、有名な「岩津の淵」と呼ばれ、四季常に紺青に広くよどみ「大ナマス」が住むとの伝説を秘めている。そのため、長さ75㍍の「鼓山トンネル」が、

その山麓を貫通し、本町と美馬郡穴吹町との境を画している。

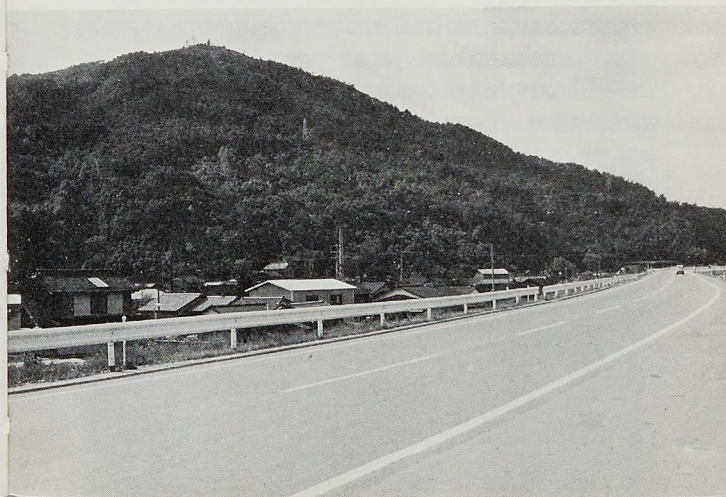
種穂山は、また昔から景勝の地としても有名で、頂上よりは、はるかにかすむ淡路、沼島などの島を眺めることができる。高さが379㍍の山頂にある種穂神社は「天日鷲命」をまつり、忌部族ゆかりの地と伝えられている。

山中は巨大な樹木がよく生育し、殊にカヤが多く、また、キク

の一種であるカヤランが多数見られる。そのほか、ギンリョウソウ(ユウレイソウ)を始め、特殊な植物も多い。種穂山の北向かいの山は「鼓の山」と呼ばれ、西行の和歌といわれる「鼓山うち出で見れば西林 岩津というはおしの住み家か」の作が伝えられている。山間を流れてきた吉野川は、この山の端を回る所からようやく四国三郎としての様子を示し、吉野川平野をゆうゆうと流れ去っている。

なお、山麓の舟戸から、阿波町、岩津にかかる岩津橋は、長さが151.5㍍、幅が1.5㍍のつり橋で、昭和33年8月に完工した。橋は小さいが、吉野川の数多い橋の中でも最も美しい。舟戸は、古来吉野川交通の要所として、また徳島鉄道の終点駅として、大正3年(1914)池田駅が開通するまで、香川、高知への駅馬車連絡駅として栄えた。

国道よりみた種穂山



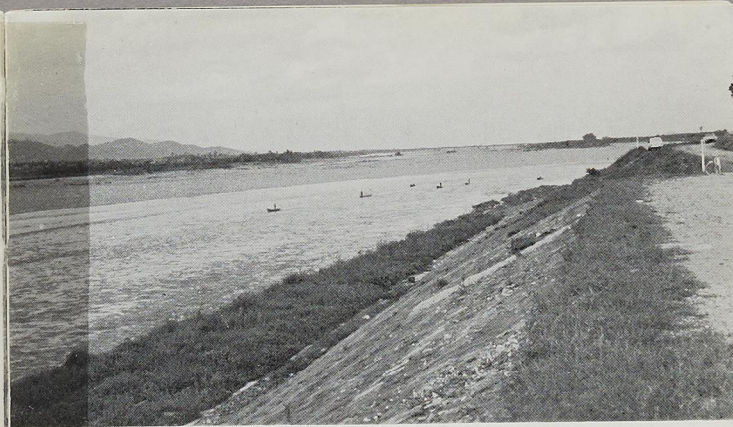


## 49 吉野川

高知県に源を発している吉野川は 177の支流を集めて、実に延 236 郷にわたり、四国山地に沿って東に流れ、紀伊水道に注いでいる。その流域は四国 4 県におよび、流域面積は 3652 平方 郷の広がりを持っている。本町の中心部を占める平坦地も、その流域の一部であり、また吉野川は、本町北部の境界線ともなっている。この吉野川が大河として大きく開ける所は、高越山の北の山裾に突起している種穂の山をめぐって、岩津橋をくぐる所からであり 40 郷におよぶ吉野川堤防も、旧川田町を起点としている。

この吉野川、川田川の合流によって、広がった瀬詰地区の広い平野は、本町の重要な平坦部であり、肥沃地となって、町民による居住地と耕作地を与えている。また、吉野川は、河川交通としても、早くから利用され発達してきた。阿北の奥地への人の往復や物資の交流には、古くから東西に流れている吉野川の水運を利用していた。三好郡川口から徳島までの間、吉野川を上下する船や筏は山川町の昔の船戸・北島浜・瀬詰浜などに発着し、ここが物資の集散地となっていた。

吉野川（瀬詰大橋・南岸より）



吉野川（北島附近より）

各種の船が上下し、その数は百数十隻を数えたが、昭和初年頃吉野川の改修工事によって「第十堰」が造られたため、帆かけ船は姿を消した。その他、渡船、船つき場も栄え、吉野川を上下する船も、途中の休憩をしたものである。

ところが、鉄道が開通したため、貨物輸送は鉄道の方に移り、しだいに船つき場もさびれていった。このように、農業・水運などに、きわめて重要な河川として、大きな恩恵を与えてきた吉野川も、一方では数限りない水害を祖先に与えてきた。地名にも瀬津・瀬詰・落久保・流など水にちなんだものが多いことは、吉野川とともに暮らしてきたわが町が、古くから水に生き、水に悩まされてきたことを物語っている。水位も明治 41 年(1908)には、瀬詰八幡神社の床上に浸水したことをはじめ、多くの水害の歴史が残っている。

しかし、大正 15 年(1926)改修工事が完成してからは、水害の心配も少なくなり、生産も増加し、現在のように人々は安心して豊かな生活ができるようになった。



## 50 川 田 川

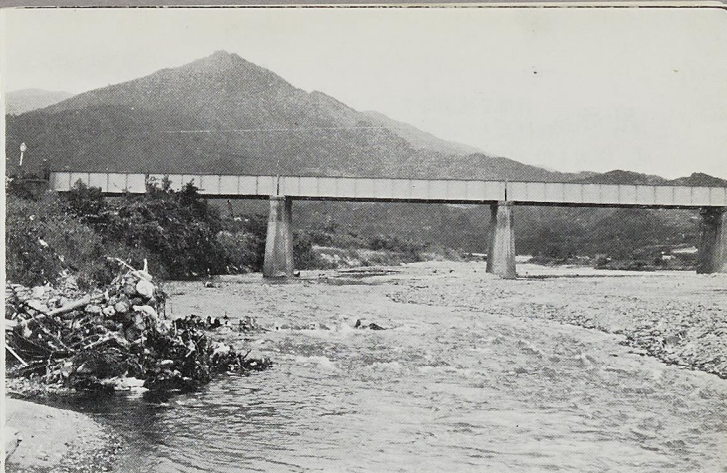
美郷村奥野々に、その源を発している川田川は、南部山地を合わせて、本町中部を北へ流れて、吉野川に合流している。川田邑名跡志によると「水上は高越山より流れ出て、中村山・別枝山・楯山より流れ、水上、三筋にして川又という所に一筋になり、川田村の真中を流れ、瀬詰村より吉野川に至る」「川田村の地名はこの川水をせきとめて田と成したためか」と書かれている。

山地は、結晶片岩層からできているため、谷が深く、峡谷状になっている所が多い。特に、迎坂から旗見に至る県道沿いの谷は景勝地として有名である。川東および町の街路が発達している平坦地は、この川田川がつくった沖積平野であり、吉野川の沖積平野とともに集落をつくり、山川町民のよき生活の場所となって発達してきた。この川田川は、昔は今の鉄道の南側を東へ流れていたものが、しだいに北を流れるようになり、湯立の北を東にまわって、鉄道の北側を東へ流れ螢川となって吉野川に注いでいる。

かつては、螢川にも渡船場があった。ところで、文政11年(1828)に、今のように吉野川に直流させるため川田川に長大な堤防を作ったので、湯立方面はいっそう危険にさらされることになり、そのために反対運動が起きたいきさつが残っている。



川田川 (川田橋より)



川田川 (瀬詰橋付近)

その後、時代の移り変わりとともに、人口問題ともからみ、護岸を強固にして、農地を拡大するため、北島から右へ曲がって湯立、螢橋に通じていた流路を、大正14年(1925)8月に、北流させて旧瀬詰の字春日で、吉野川に直流するよう変更した。このため旧瀬詰、旧山崎では、下流に沃田が開かれ、さらに用水もつくられ、昔の面影は一部分のみとなってしまった。

また、大正14年(1925)8月には、国道に瀬詰橋が建設されて、その様相が一変した。一方、螢川は川田川に堤防ができたため、今では川田川との連絡が絶えてしまって、両岸一帯は開拓され、水田となったので、川幅はたいへん狭くなっている。そして、吉野川への入口に水門がないため吉野川が、洪水の時は逆流して氾らんし、田畑・家屋に浸水し、交通が杜絶することがあった。

特に、螢橋付近は、古くは水流が激しく、そのため、大きな渾がで、今も河道にその当時の名残りをとどめている。



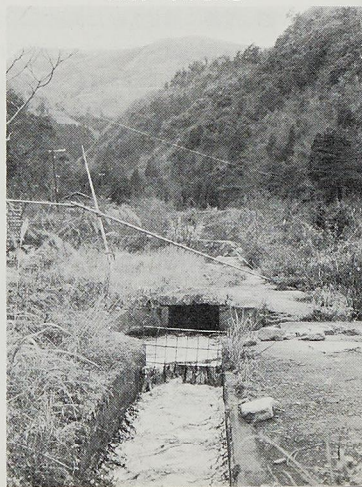
**用水** 農業を生活の主としていた昔の人々にとっては、旱魃は大きな災害であった。慶応2年(1866)には80日間、明治4年(1871)には76日間、明治27年(1894)には137日間も、雨が降らなかったとの記録がある。これらの対策として、われわれの祖先は、溜池や用水の建設等にひじょうな努力を払ったものである。わが町に縦横に張りめぐらされた用水路は、祖先の血のにじむような苦勞が含まれている記念物であるといえる。

本町における用水の主なものには「翁喜台用水」「川田西用水」「川俣用水」、また、耕地整理としては「西川田耕地整理」「湯立耕地整理」等があげられる。

## 51 川田西用水

新用水、または枕木用水ともいう。落成は嘉永2年(1849)であり、当時の発起人、高尾莊十郎、工事監督、三木熊兵衛、原田伊勢八等の功勞による。

水利組合設立は、明治31年(1898)であるが、当時紙すきのため水車によって運転する水車業(6軒)と水利組合との間に、加入金、負担金の問題で紛争があり、この間3ヵ年を要し、80日間も防水口に工事をし、番人をおき、水をとめたとの記録がある。かんがい面積は43畝である。



西用水・水源地付近

なお水源は、川田川の上流「奥ノ井隧道」の上方の谷より引水している。



西用水・水源地

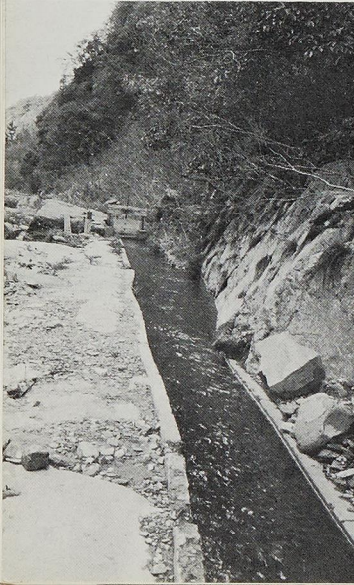


## 52 翁喜台用水

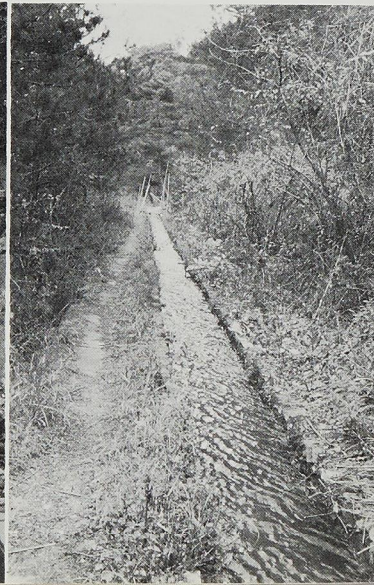
「東用水」とも呼ばれ、弘化年間（1844～1847）の初めは、旧川田東の「眠瀨」下流堤防の東手を通水して灌漑し、その広さは27.8%であった。これは当時の藩士長谷川某、勸農方三木熊兵衛という人の功績による。

その後、弘化12年頃（1855）に至り川床が高くなったため、上流の「赤間瀨」をせき、旗見の下筋を開さくして「眠瀨」の水と合わせたが、近年になって、鉍毒をさけて、さらに上流から引水している。

翁喜台用水水源地付近

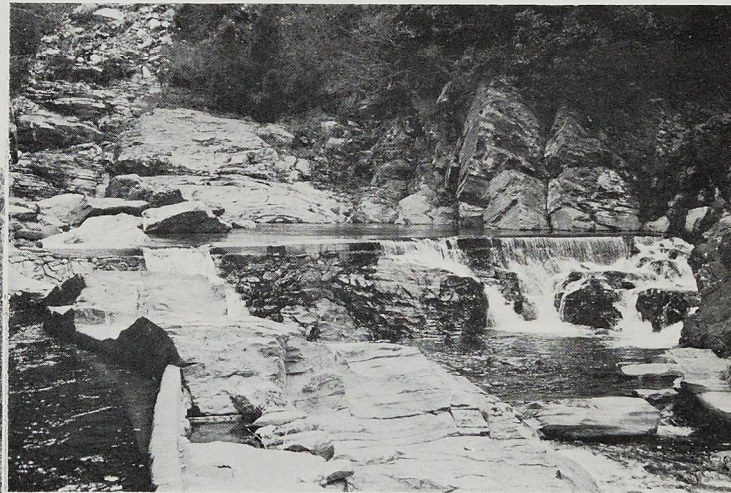


翁喜台用水上流



灌漑面積は35%の広さにわたり、このため今まで稲作に不便であった翁喜台地域も広く水田化されるようになった。

なお、水源は川田川の上流で、迎坂トンネルの東方の谷から引水している。



翁喜台用水水源地

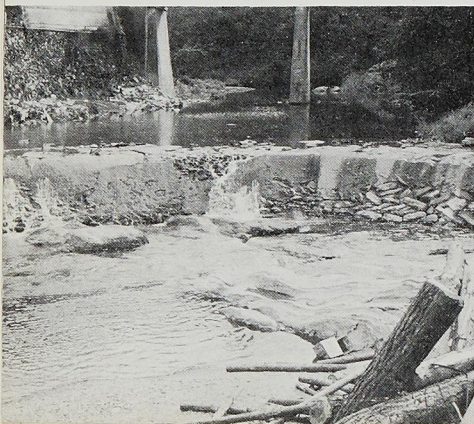


## 53 川 俣 用 水

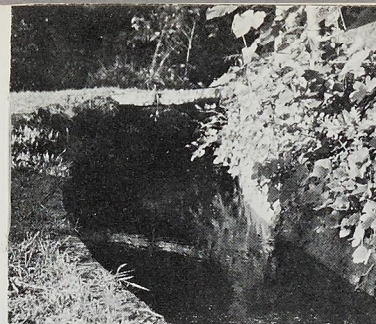
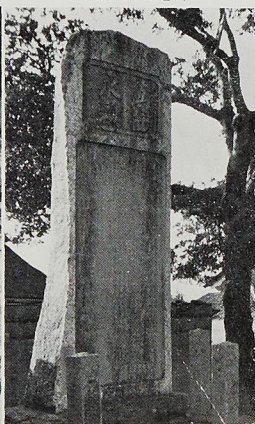
旗見・麦原・住吉・西ノ原・宮地・青木・八坂・祇園などは広い部落が散在し、広い耕作地が開けている台地であるが、川田川上流より取り入れた川俣用水が通じているので、至る所が水田となっている。この段丘の中央部にある、麦原庵の横に立てられた川俣用水開さく記念碑は、自然の流水による灌漑がどのように先人の苦心と協力によってできたかを偲ぶことができる。

明治27年(1894)の夏、郷土は大旱魃にみまわれ、農業は無収穫で、その害はひどかった。その結果、当時の山瀬・川田の有志が相談して、明治29年(1896)に測量を開始し、川俣用水の完成をみたのは、明治32年(1899)の夏であった。それによって、100畝に近い水田がにわかに見られることになったのだから、当時にとっては、驚くべき、大きな進歩であり、意義も深かったと思われる。それから70余年の間、人々は年々収穫の秋には、今更のよう

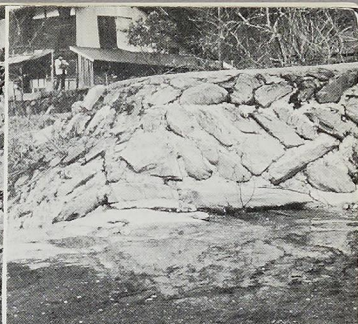
川俣用水水源地



川俣用水記念碑



川 俣 用 水

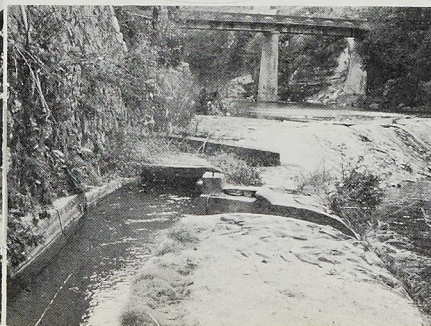


川俣用水引水口

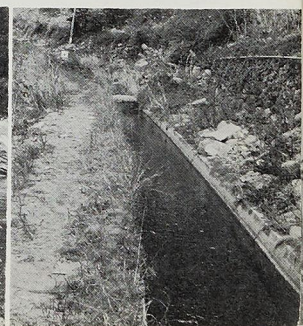
に、この用水の開さくに努力した先人の遺徳を偲んでいる。

しかし、こうした先覚者達も、当時は開拓につきものの非難を激しく浴びたものである。なぜなら、農家には、年々莫大な用水建設費用の負担がのしかかってきたからである。川俣用水開さくの時、先覚者達はわき立った連中に、われわれ百姓を餓死させるのかと、竹槍で追いかけてまわされ、全く命がけの仕事であったという。なお、この用水は昭和28年から、3ヵ年計画で国の補助を受け、840万円ですべてをセメント水路に構築し、その面目を一新した。なお、功労者として工藤貫一・佐藤武五郎・松村由助・藤原初三郎等があげられる。

水源地付近



川俣用水上流





## 54 湯立耕地整理

明治末期には、耕地整理が全国的に行なわれたが、本町でも、明治40年（1907）に、これに着手した。

そのうち、湯立耕地整理組合は大正3年（1914）4月24日に創立総会を開き、耕地整理に着手した。当時の初代組合長平野鍋吉、副組合長住友春太郎のもとで、大正7年（1918）3月に、24.8%におよぶ整地を完了した。

これらの大事業については、通常土地整理による個人の利害や損得が紛争を起し、むだな経費を要することが多いのであるが、発起人の熱意と努力は、よく組合員を説得し、りっぱに耕地を整え、土地の高低を正し、水路を引いて灌漑や排水の設備を整えていった。

なお、湯立の山王神社境内に耕地整理記念碑が建てられ、いつまでも先人の功績を伝えている。

総工費 9,692円76銭

幹線水路延長 1,800m



湯立耕地整理記念碑（山王神社内）



湯立耕地整理のあと



## 55 川田耕地整理

大正3年(1914)3月5日に、川田耕地整理組合が設立された。当時の阿波の特産物である「藍」は時代の流れに押されて、すでに衰えはじめたので、耕地を整理して、水田を作ろうとの計画が立てられ、同年の7月に水源を吉野川に求めて、60馬力の動力による揚水機を設置した。そして、はじめて同区内に水を通し、しだいに水路の修築、耕地区画の整理を行ない、地価の修正を終わり、96.2%にわたる整理を当初の計画通りに完成した。

その後、大正13年(1924)に、吉野川の改修工事によって水位が低下したので、引水口を改造して、水路全線を鉄筋によるコンクリート工事を施したが、この工事は、非常に難工事で、苦心の末にやっと永久的な水路が完成した。

また、大正15年(1926)に、今までの蒸気動力を電動力に改め揚水量も増加した。また昭和6年に河川敷内を延長し630畝の埋植(地中にうずめ、水を出し入れするため、戸をあけたり、しめたりする設備)を伏せて取水の完全を期した。そして、土地をうるおし、物を養い永くこの文化を育てる源としようとの、村人一致協力の心が、実を結び、全区97%を灌漑するようになった。



川田耕地整理の用水



川田耕地整理のあと



川田耕地整理記念碑



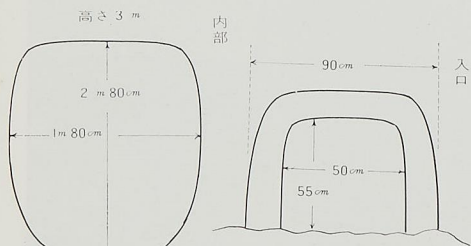
## 古墳

県内の古墳は、吉野川の流域や南方の海岸地方に多数分布しているが、わが山川町においても旧川田・山瀬の台地、丘陵および山腹などで現在までに22ヵ所も発見されている。この中、旧川田分が旧山瀬分よりもはるかに多いことが注目される。徳島大学沖野教授編「徳島県古墳調査報告」の分類によれば、これらの古墳は吉野川下流南岸地帯の西端に属するものである。これら山川町の古墳はすべて円墳であり、内部構造が壘穴式のもの1基だけで、他はすべて後期の形式とされる横穴式である。すなわち、6,7世紀までのものであり、今から1,400年以前にさかのぼることはないようである。

なお、本町の古墳の中で現在、外形がほぼ完全に残っているのは、境谷古墳と忌部山頂の古墳である。

### 56 境谷古墳 宮地境谷

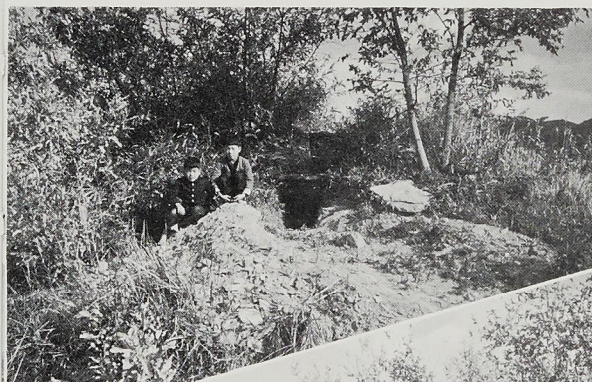
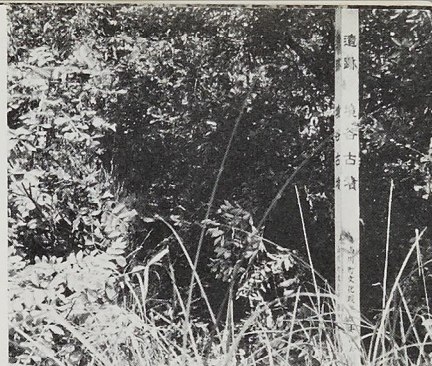
境谷古墳と呼ばれているこの古墳は、宮地境谷の山林にあり、今まで山川町で発見された古墳の中では最大のものとされる。底径が10㍍、高さが3㍍ほどのものであるが、いつの頃にか発掘され、副葬品もほとんど失われているが、昭和33年7月14日に行なわれた再発掘によって、碧玉（出雲石）の管玉2、水晶石1、銅製耳環2、鉄製鏃数個、その他土師器、須恵器の破片多数が現われた。



このことから、われわれの郷土に、石

器時代（紀元前10世紀～3世紀頃）から人が居住していたのではないかと推察できるが、おそらく武人的豪族のものであろうといわれている。

境谷古墳標柱



境谷古墳 宮地境谷  
(昭和33年7月発掘)





57 西ノ原古墳 西ノ原59番地

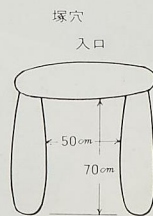
山川駅の南方の台地にある西の原、工藤普一宅の庭に「無縁大師塚穴」と呼ばれる横穴式の円墳が残存している。昔は表面積が約1畝もあったと言われているが、現在はけずりとられて田畑と化している。以前、塚穴がくずれ白骨が出土したこともある。

現在、その中に地藏様を安置しているが、それまで一度鉦（たたき鐘）の音がしていたが、それを祭ってから音が止んだとの伝説がある。現在、塚穴の入口に「南無大師」と刻まれた碑が立っているが、これは古墳の入口のふた石であったといわれている。また、この碑石に伝わる伝説も多い。

なお、西ノ原にはかつて塚穴が3か所あったが2か所が現存している。

底径 7 畝20

高さ 3 畝60



西ノ原古墳

西ノ原古墳（外形）



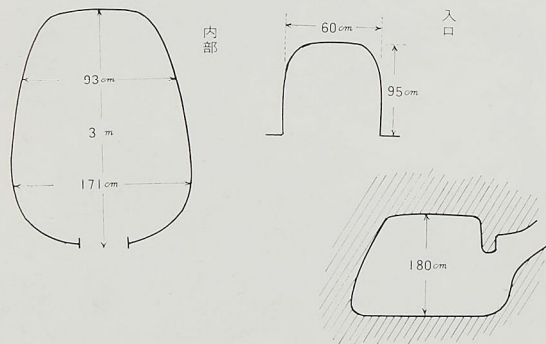


## 58 忌部山古墳 忌部山

現在の忌部神社地地の東側を尾根道づたいに南へ 400 程ぐらい登ると、平坦な忌部山頂に達する。そこには、大きな横穴式の円墳が内部の石壁や外形も完全な形で残っている。

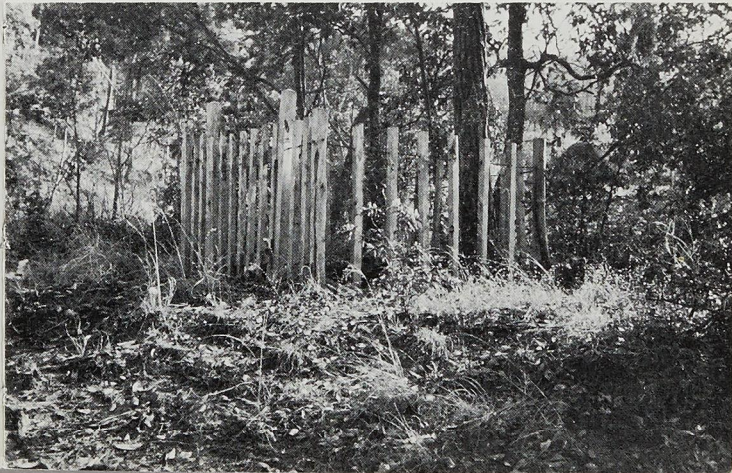
副葬品は散逸して見られないが、当時の制度から考えて、高貴な人の墳墓であったことは明らかで、恐らくは忌部系のものであろうと推察せられる。

なお、山頂には、このほかに 2 基だけ残っているが、埋れたり破壊されたりして、わずかにその跡をとどめているに過ぎない。



忌部山古墳

忌部山古墳（忌部氏の廟所であつたと伝えられる）  
古墳のように思われる点がある。青樹社とよばれている。





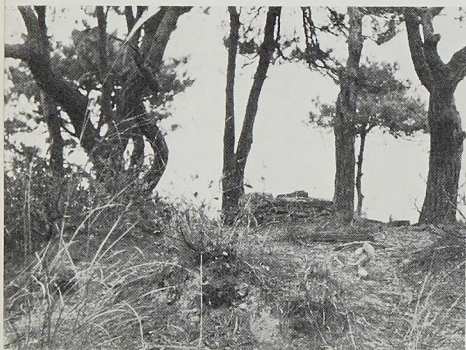
## 59 西山古墳

川田の天王原を中心に、南は奥原から北は大峯あたりまでの山上や丘陵地に、古代人の墳墓である古墳が点在している。ほとんどがすでに盗掘され、その原形をとどめていないので、それが古墳であるかどうかさえ疑わしいものもある。

しかし、その識別の決め手となるのは、墳墓の石棺の材料である緑泥片岩の有無である。本県は緑泥片岩の産地なので、本県の古墳のほとんどがこの石材で作られている。

古墳が多く作られたのは、3世紀から7世紀にかけてである。古墳は位置・封土・内部構造・副葬品の4要素で前中後の3期に区分できる。前期（3～4世紀）は封土は円・方・前方後円で丘陵の突端・台地に位置し、内部は竪穴式石室で木棺・粘土棺・船形石棺が多く副葬品は鏡・刀・剣・勾玉・管玉が多い。

中期（5世紀）は前方後円墳が壮大で前方部が張り出しており平



西山古墳

地に位置する。副葬品に馬具を始め武具類の発達が見られる。後期（6～7世紀）は円墳・方墳が多く、群集墳も多い。平地・台地・丘陵いずれにも位置し、内部は横穴式石室で家形石棺や副葬品

には須恵器・環頭刀・金製耳飾などと工芸的なものも多くなる。

天王原の古墳からは、須恵器やサヌカイト（石器の原材料になる硬質で黒色の石）が発見された。このことから考えて、おそらく後期のものではあったと思われる。天王原には2つあったらしいが、今は原形はみられず、古墳に使われていた青石が神社の東北にあり、腰をおろす休み場として使われている。これは、その大きさから考えて蓋石と思われる。

塚穴の古墳は、パイロット工事のため跡形もなく、古墳に使われていたと思う青石が四散している。あとの2つは、祠を建ててあり、古墳の石がそれに使われている。

西山の古墳は再調査の必要があるが、昭和45年10月、パイロット事業中須恵器が発掘され、研究の先ゆきを明かしてくれている。

塚穴古墳







川田山村庄屋屋敷の門

## 60 庄屋屋敷

庄屋は関東では名主、関西では庄屋、肝煎、政所とも呼ばれた。いわば、村長である。一般に古い家柄で、村の中心になって代々庄屋になった。その仕事は村単位に決められた年貢を農民に割り当てたり、年貢納入に立ち会ったり、また村の土木工事や戸籍調べ、宗門改めを行ない、また土地の売買や質入れの証文に印をおしたり、農民からの訴えの書類に目を通したりすることであった。

本町は江戸時代に、山崎・瀬詰・東川田・西川田・川田山の5つの村に分れていた。その各村に1軒の庄屋があった。現在、庄屋屋敷の名残りをとどめているのは、写真にある迎坂の住友家だけである。この住友家は川田村の住友家とは別系であり、川田山村が分立した天正17年（1589）から庄屋を勤めている。同家は約

100年前まで現在地より西南約500疔の皆瀬にあった。現在の建物は、その大半は移転して建てたもので、ことにその門の様式は貴重なものである。なお、同家には系図をはじめ多数の古文書が所蔵されている。

東川田村の庄屋跡は村雲の福山家のある所で、天王原の住友家が元そこにて庄屋を勤めていた。西川田村の庄屋跡は、川田天神の原田家のある所であり、その西隣の住友家が庄屋を勤めていた。東川田村の住友家が、天正16年（1588）より川田村の庄屋を勤めており、住友家の宗家であった。

西川田村の住友家は川田村が東西に分れた時に、分家したものである。住友家の古文書は、最近に鹿児島進七が「住友家記録」と題してこれを写したが、極めて貴重な文献とされている。

山崎村の庄屋跡は宮島の小井田家の所であり、庄屋を勤めていた田中家は、現在絶えているので、同家に関する古文書は不明である。

川田山村庄屋屋敷



瀬詰村の庄屋跡は若宮の安部（忠一）家の西側であったが、ここも庄屋を勤めていた安部家は、現在大阪へ転居しているので、古文書などは全く不明である。



## 61 山尾家・寺内家・真鍋家

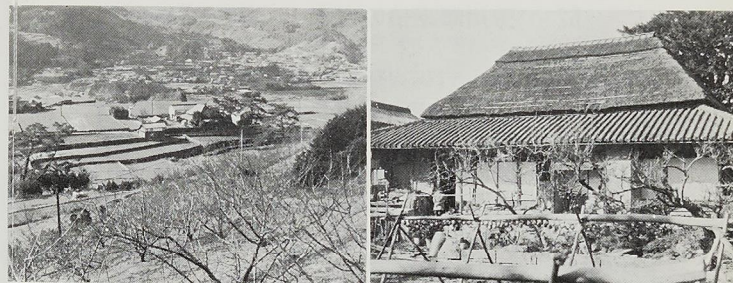
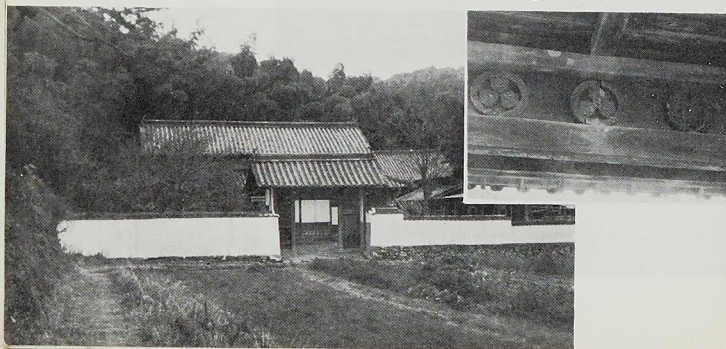
山尾家 井上37番地  
 寺内家 若宮156番地  
 真鍋家 石堂14番地

井上の高越登山口、学坂の鳥居付近から西を見ると、正面に門があり、白壁に囲まれた瓦葺きの家がある。それが江戸時代に山奉行を勤めていた山尾家である。現在の家は今から約100年前に建てられたもので、様式は書院造りである。入り口が2ヵ所あり表玄関は身分の高い来客が出入りしたところであり、北側にある玄関が日常の出入りに使用された。同家の門は、徳島城の内門を明治6年(1873)に移し建てたもので、その門には同家の家紋である「三ツ柏」の紋が2つと、赤松家の家紋といわれている「三ツのさねだき柏」の紋が1つ、合計3つの紋が並んでいる。徳島城は明治初期(約100年前)に取りこわされ一部残っていたが、昭和20年7月の空襲により焼失してしまったので、山尾家の門は徳島城の唯一の遺物といってよい。

山尾家はもと姓を赤松といい、尾州(愛知県)海東郡蜂須賀郷

山尾家

山尾家の門の家紋



横走から真鍋家を望む

若宮の寺内家

花木村に住み、はじめは織田家に仕えていたが、赤松万右衛門の時、元和9年(1623)に現在の地に来て、山尾という苗字に改めた。以来、明治初年まで山奉行を勤めていた。したがって古文書も「先祖由緒書」と「御林諸用記録」が3冊、その他の土地売買に関する記録等数多く書蔵されているので、書院造りの家とともに町文化財の宝庫の一つであるといえよう。

瀬詰の寺内家も山奉行を勤めており、建築様式も山尾家とよく似ている。同家はもと稲田の家臣であり、元和年間(1615~1623)に現在地に移住した。多数の古文書もあり、重要な史料として保存されている。

旗見の真鍋家は今から約150年前に建てられ、葦葺四方下で、門・寝床・倉を備えたりっぱな屋敷構えである。屋根は鉄板で包んであるが、総葦葺は県下でも数少ないであろう。



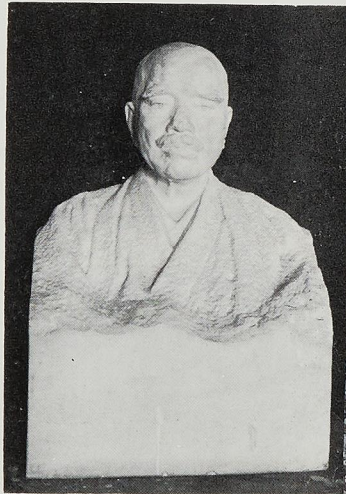
## 62 芳川顕正伯の生家 川田1204番地

芳川顕正伯は、明治時代に内務大臣・司法大臣・通信大臣・文部大臣等、政府の重要な役職につき、特に文部大臣時代には、教育勅語発布の功労者として、山川町の誇る第一人者である。幼名は賢吉といい、後に「越山」と号した。天保12年（1841）12月10日旧川田町に生まれた。芳川伯の生家は、祖父省博、父民部とともに代々医者をして業としていた。顕正伯自身も、藩の医学生として長崎に留学した。

そして、蘭学を修めるとともに、政治学を学び、明治、大正時代の政界の要人として、日本を背負って立つ人々の中でも、特に光った存在となって活動し、最後は当時の枢密院副議長までもなった。

また、吉川伯が郷土のために尽くした大きな治績として、吉野川の改修工事をあげることができる。当時の金で1,000万円のコストを要した困難な大事業であった。それ以来、吉野川流域は毎年の洪水から救われ、今日に至っている。

この芳川伯の生家は、山川町字北島の地に現存していて、町有として原形のまま保存されて



芳川 顕正伯像

いる。生家の周囲には、西と北に生垣とエノキの大木があるが、これは、この土地一般の家屋と同様に冬季の強い西北風を防ぐためのものであろう。家屋は約66平方メートルほどの四方庇のわらぶきの母屋だけである。多くの農家は納屋をもっているが、医家としてはその必要はない。

特に、一般民家と異なる外観は、南正面に間口1.8メートルの玄関をつけてあるが、これも当時の医家としての、構えと思われる。

教育勅語発布50周年記念に当たり、芳川伯の遺業をたたえる一つとして、生家およびその遺品をここに集めて保存してある。また、軒下には、おかげもつるしてあり、その当時の面影を残している。

芳川 顕正伯生家

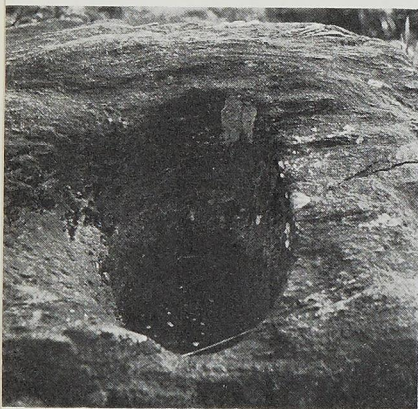




63 岩戸神社 甌穴 おつけつ 岩戸3番地

岩戸神社の南側には、ところどころに緑色片岩の岩盤が露出し、その岩に石うすのような穴が見られる。これを甌穴（おつけつ）といって、昔水流によって岩に穴があいたものである。そして甌穴は大小14箇所ばかりあるが、最大のもは直径90センチ、深さ1メートルもあり常に水のたまっているもの、ひょうたん型のものなどがあり変化に富んでいる。

伝説によれば昔忌部族がアサを植え織物をつくるため、石をえぐってうすを作り、これについて糸にし、池でさらして岩上に干した遺跡ともいわれる。また、最も高い岩の上に直径が35センチ、深さが35センチの穴があり、その中の水は干天にもかかれず、大雨にもあふれることはないと言われ、誰がいうともなく、この水を



岩の上の甌穴

をいただければ重い病氣も治るといい、遠近の人々はこの水を延命水とあがめっていると、阿波志に記録されている。

また、土御門上皇もこの地に来られたとき、この霊水で病を治したとも伝えられている。また、この神水を穢したときは風雨が起きると天日鷲宮縁起にも記されている。土地の人々は、この霊水

はこのように由緒ある尊いものだから、その前に船戸神の祠を作り、そこに水がめを備えつけ、神職が霊水をくみ入れておき、参詣人は備え付けの小さな竹柄杓にて容器に霊水をくみ取って持ち帰り、決して岩穴の霊水に手をふれなかったと言われ伝えられている。

岩戸神社付近は、もとの吉野川の河床であった。河床の岩が流水の作用により磨耗して甌穴ができることは、緑泥片岩

の特長である。さらに、岩戸池、学の森池、川島の蓮池など一連の河跡があり、約1千年前には、吉野川は山川町湯立から川田川を合流して、山崎の山ぎわを東流し川島町学島を経て、同町久保田から現在の吉野川の位置に流れこんでいたと推定される。



岩戸神社甌穴



64 韮橋の紅簾片岩

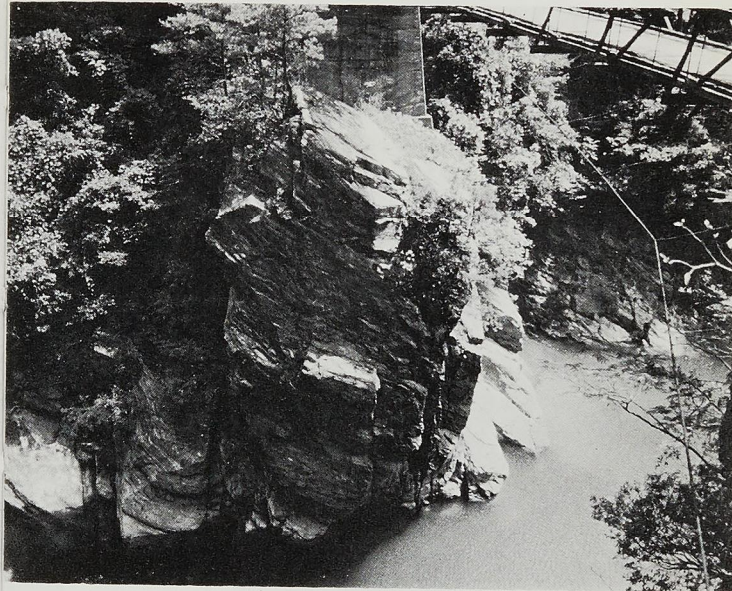
旧高越鉱山から県道を下ること2里、また山川駅から3里のところ、川田川が高越の山なみを突き破って北へ流れるV字谷がようやく終わるあたりに、古びた吊橋がかかっている。これを韮橋という。この吊橋は水面より20尺ばかりの高さであるが、この橋台が兩岸とも珍しく大きい紅簾片岩で、とくに東側のものは、水面より高さ15尺、横幅8尺、奥行10尺の巨大な岩である。

紅簾片岩というのは、絹雲母石英片岩および絹雲母緑泥片岩の中に紅簾石を含んだ結晶片岩で紅色を呈している。紅簾片岩はその岩層が川田川の浸蝕によってところどころを断ち切れ、川田川の兩岸に数ヶ所の露頭が見られる。韮橋附近ではほぼ東西に走る紅簾片岩の層があり、傾斜は南へ30度の角度をなしている。

明治の頃、この付近に川田山鉱山（名越鉱山）があって品質のよい斑銅鉱を多く産出していた。そして、この鉱石を橋の上手で製錬していた。製錬の方法は鉱石を炉に入れコークスを使って焼く原始的なものであるが、そのために空気を送る必要があった。当時の送風機は原始的な鞴であった。たくさんの鞴を使う労働者にちなんで、韮橋の名がつけられたものと思われる。

橋の左手の清らかな水の流れる用水路に沿って上流に登っていくと、まもなく左手の斜面にふきがら（銅を製錬した残りかす）を棄てたあとが見られる。対岸は川田山鉱山の廃坑である。

さらに進むと土地の住民が公害闘争の結果、高越鉱山に作らせたという翁喜台用水のえん堤が見られる。



韮橋の紅簾片岩



## 65 旧高越鉬山 大内96番地

川田川の支流奥野井川の赤茶色の川原を左に見ながら2畝ばかり進むと、眼前に高越鉬山の廃坑が開けてくる。明治以来、多くの人たちが汗を流した坑道はコンクリートで閉されている。この鉬山は明治初年その露頭が発見され、明治29年(1896)頃個人経営で原始的な手掘りで採掘が始まった。

鉬石を製錬して銅170トンを生産した。明治36年(1903)には高田商会に経営が移っている。大正5年(1916)に会社経営になってから、現在の県道を通じ、当時の湯立駅へ索道を通じ、火力発電を行なうまで活況を呈し、月産銅75トんに達した。坑外施設が現在の位置に定着したのはこの時代である。

明治31年(1898)から昭和13年までに採掘した鉬石の量は140万トンのほり、それは金、銅、硫化鉄鉬であった。昭和の時代になって施設が近代化され、空気圧縮機を増設し、積極的に操業をおこなった。日本鉬業の経営になって活発な探鉬および採鉬により生産量は増大したが、昭和13、4年頃から鉬石の品位が低下してきた。昭和25年に、久宗、大内、川田山各鉬山を買収し、探鉬開発に力を注いだ。鉬況が芳しくなく、昭和28年高越鉬業に経営がかかった。

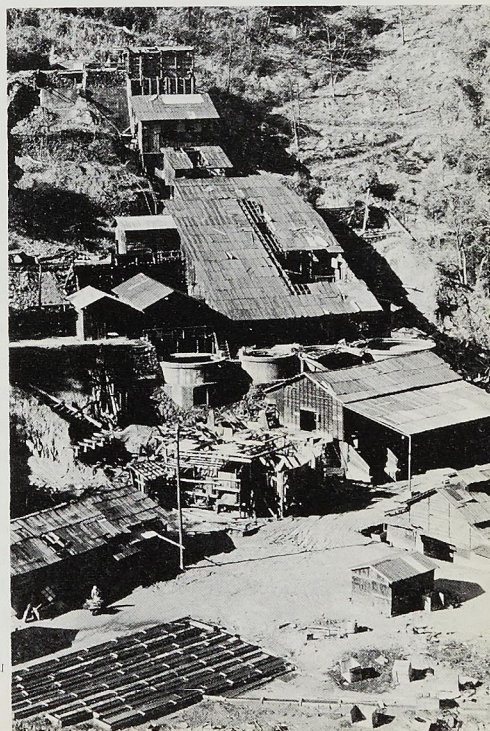
人員整理、賃下げ等の大きな労働問題が起こったが日本金属鉬山労働組合の支援も空しく、高越鉬業労働組合は解散となった。高越鉬業は残った鉬石の採掘、久宗、大内鉬へ連絡する堅坑をつくり開発に積極的に努力するとともに、浮游選鉬場を完成し操業を行なったが、出鉬量がしだいに減少し、昭和42年合同資源および新高越鉬業の経営にかわり、さらに探鉬開発に工夫を重ねたが

貿易自由化の影響もかさなり、昭和44年3月に、73年にわたる歴史を閉じた。鉬床は4ヶ所あり、高越本鍾(鍾とは鉬石の層のこと)大内鍾、久宗鍾、川田山鍾と鉬山では呼ばれていた。

産出する鉬石は主に含銅硫化鉄鉬であり、藍閃緑泥片岩中に層をなしてあり、近くに紅簾片岩を伴ない、下部に絹雲母石英片岩の薄層があるのが<sup>さくろいし</sup>石榴石、磁鉄鉬、石英、方解石なども含まれて

いる。高越本鍾は東西に2,000m、大内鍾はこれに対し約60度~70度の角度をなし、久宗および川田山鍾はそれぞれ東西に走っている。

現在残っている仕事は、坑内水よりイオン交換により沈澱銅を採集する作業だけであるが、しだいに銅成分が減少してくると、この作業もその必要がなくなるであろう。



旧高越鉬山



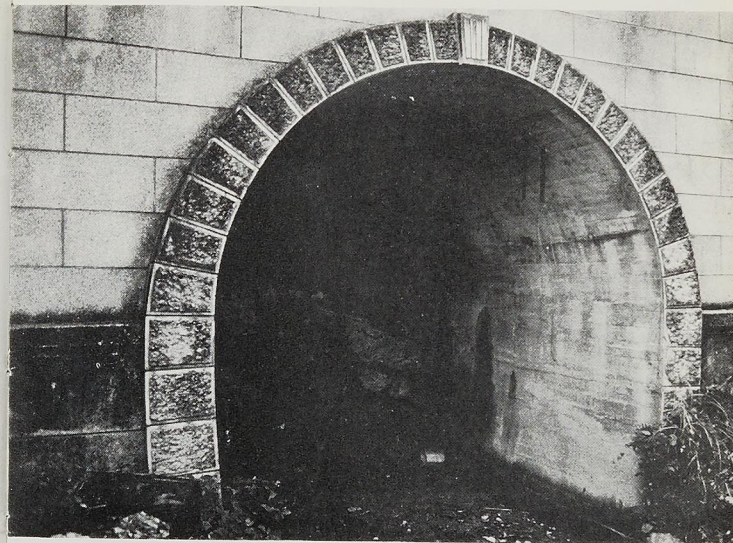
## 66 旧久宗 鉱山

川田川が平地に流れ出る左岸にうず高く積み上げられた廃石の棄て場に沿うて山麓を南へ少し登ると、コンクリートで閉ざされた坑口や機械をすえてあったらしく油でよごれた土間のバラックなどが、梅畑の間にちらばっているのが見られる。ここが久宗鉱山の廃坑である。

坑口から北東へ50㍍ばかりのところには小さな住宅があり、その前に記念碑が立っている。その記録によると、久宗鉱山は明治25年(1892)岡山県人青木鹿次が佐藤文彬より鉱業権を譲り受け、採掘を始め明治40年(1907)4月鉱業権を他に移譲したと記してある。即ち、明治40年徳島鉱業株式会社に経営が代わり、昭和12年石原産業株式会社に、昭和25年高越鉱業株式会社にそれぞれかわっている。

なかでも、石原産業の経営になってからは、川田山鉱山(名越鉱山)と合わせて操業し、従業員は三百数十名にのぼり最も繁栄した時期であった。しかしながら、代々の経営者は有害物質の排出をほとんど野放し状態にしたために附近の住民に公害を与え、長期間にわたって住民の公害闘争をひきおこした。すなわち、操業をはじめた明治の時代には採掘した鉱石を現地で野焼にしたために、亜硫酸ガスによる煙害により山は草木が枯れて赤茶けたはげ山となってしまった。

また、附近の住民の中にはガスのために、喘息などにかかる人が多く、また雨水や坑内水により硫酸や銅分を含んだ水が用水や地下水に浸透し、そのために農作物はとれず、井戸水も飲めなくなった。これを問題とした住民は組織を作って鉱山経営者とかけ



旧久宗 鉱山

合う一方、東京までも出向いて当局へ公害に対する行政措置を訴えるなどして、公害防止に努力した。

鉱山では鉱水に石灰を加えて中性にすることや、製錬のために出る煙を山上に大煙突を建設し煙害をへらし、鉱山を横切る用水路を暗渠にし鉱水の流入を防ぐことを実行した。しかし鉱山が操業を停止するまでは、これらの問題の解決することはなかった。

今に、鉱内水は赤茶色の沈澱をみぞに残しながら、川田川に流れこんでいる。

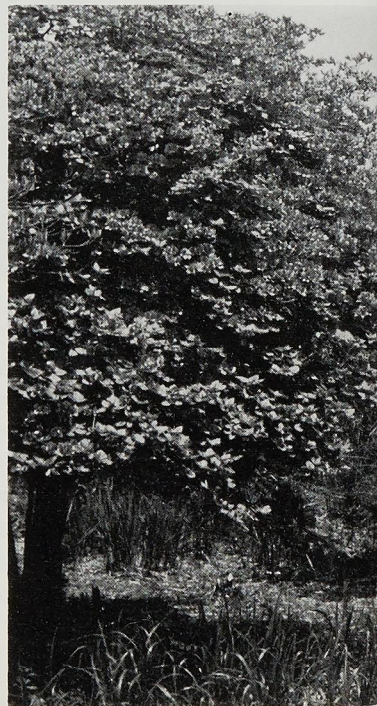


## 67 船窪ツツジ群生

奥野井部落より南西に向かって2廻ばかり登ると、標高1,000mの船窪ツツジ公園に達する。その名のように舟底形に窪んだところに古来天然のツツジや、ツゲの大木が群生し、その大きいものは1本で優に6畳を覆うことができる。ツツジの群生は10畝におよび、その花は5月中、下旬頃一斉に開花し、花卉の色は赤、桃、紅などがあり、平地のそれとは違って実に鮮やかである。このツツジは先年県天然記念物として指定され、現在、県文化財として指定を受けている。

船窪より東西に尾根を縦走することができる。東へ4廻のところは西野峰部落があり、その途中に三十釜所の旧跡が見られる。これは、昔兵士たちにたき出しをしたところといわれている。

西へ3廻のところは高越寺がある。初夏のころ、新緑



蒼えるこの道は右下奥野井の遙かかなたに鳴門の海が見え、左手には穴吹町口山を眼下にのぞみ、遠く剣山の峰々が紫がかった藍色に見え、その山嶺の美しさに心を打たれる。

船窪ツツジ群生（県指定天然記念物）





68 井田の大グス 井上67番地

今から 200年以上前に、この土地に井田神社があったという古い記録がある、大グスはその神木として今に残されたものと思われる。

その大きさは、周囲が幹の下端で9.5㍍、目通りで7.1㍍、根まわりが29.1㍍あり、高さは1の枝まで4㍍、全長は24㍍、枝の張りは周囲の直径が32㍍におよび、樹齢は 400年と推定される。このあたりは、昔谷屋敷ともいわれ、泉屋敷の留守居、谷馬之助の住んでいたところといわれている。附近に古塚があって土器が出たという記録もあるので、数百年前から神社があったことが想像される。

なお、この神社の西隣は木綿麻日記で有名な竹光庵があり、名水柳の井は北に、ひびの水は東にあり、井上城跡は西高地台の上にさらには高越寺、高越神社の鎮まる高越山は南西にそびえて、おそらくこの地は川田の政治、文化の中心地をなしていたのではないかと思われる。

井田の地名については、むらめいせきし川田邑名跡志の著者は、井田の税法の公田にこの地をあて、さらに支配者は従者の中央に住居を構えると考え、昔の支配者が住居を定めていたので井田と名づけたように説明しているが、井田はいいだで山手の田を表わしているのであるまいか。東側にこもだ（隠田一千拓地）があるので、それと対比したい。

この大グスは、昭和44年8月6日に、山川町から天然記念物に指定されている。



井田の大グス



69 西川田の大クス 市久保(旧川田市)

吉野川堤防に接して楠木神社があり、クスの巨樹がある。目の高さで周囲12畝、幹は地面より2.5畝のところまで3つに分かれ、その枝は堤防の上まで覆いかぶさり、背丈は約20畝である。木の根元に小さな庚申塔があり、寛文4年(1664)12月3日と目付がある。附近のたたずまいからしても、クスの木は300年前にこの地にあったものと思われる。

また古記録にも、井田の大クス・観音堂のマツとともに名木に数えられている。かつて、この木について所有権の争いがあり、大枝の一部が切られているが、現在も堂々たる偉容を保っている。

川田名跡志によれば、楠木神社というのは楠木神ともいい、祭神は素戔嗚命すさのおのみことであり、この楠木神はかわった神様で、この神様にお祈りをする人は白羽の矢を供えて祈ったと記されている。

神祇詠歌に

諸人の祈る願いに梓弓

白羽の矢をぞ手向けにはする

と、そのさまを歌っている。



西川田の大クス



## 70 穀谷の大マツ 井上310番地

高越山の登山口に大きな黒マツの木がある。これは別名観音堂のマツとも呼ばれている。すぐ横に観音堂がある。マツの背丈は約20㍍、幹の周囲は目の高さで4.8㍍、地面から2.5㍍のところ、幹が3つに分かれ、枝の張りは20㍍ばかりである。昭和43年8月落雷のために北東に伸びる大枝が損傷し、またその枝を切ったために現在では全体の形が変わっている。

この附近を穀谷というが、昔、寺があって、住民から取りたてた年貢や初穂を納めておく納屋があったので、この地名ができたといわれる。旧暦9月24日は高越神社の祭礼で、昔は毎年大相撲が行なわれ、その中から天下無敵の力士「一本」も生み出された。

マツの下に小さな記念碑があるが、その碑には昭和24年、川田中学校建設のため同校愛育会（PTA）会員が道松 149本を伐採し、その代わりに道標として黒マツ、スギ、ヒノキ 1,300本を参道の両側へ4間おきに植えた」と記してある。もう今はない参道のマツは、観音堂の大マツにその面影を残している。



穀谷の大マツ



## 71 高越神社の大スギ

高越神社附近には、スギの大木がたくさんあるが、その中に神社の石段の下に数百年を経たと思われる大スギがある。目の高さで、直径が3疋、高さが30疋ばかりであるが、平地からも高越の頂上附近にそびえるその姿を見ることができる。この附近にこのような大木を含む原始林が残ったのは、藩政時代に高越寺領として保護されたらしく、文化3年(1806)の御検地帳にその記録がある。古来大森林は雨を呼び農業に利益をもたらすものであるとして、みだりに伐採しないように土地の人々から大切にされたものと思われる。大スギについて次のような伝説が伝えられているので紹介しておこう。

今から300年前、板野郡のある修験者が高越山に登り修行を続けていたが、その後、姿が見えなくなった。この行者が家を出る時「自分は高越大権現のお召で山に入るが、難行苦行を積んで、りっぱにお仕えるから再び家には帰れない。もし、わしに会いたくなれば頂上の大スギの所に立って呼んでもらいたい。大スギが活着している間は自分の命があるものと思え」と言い聞かせたとのことである。

それから250年もの後、明治40年(1907)頃に、どこから来たのか、無縁とってきかない風体はしているが、犯し難い顔の老人が香川県三木町に住みついた。いつのまにか近くの子どもや若者どもがなついて、しだいに老人のもとに集まるようになった。老人は集まった若者たちにいろいろ教えを説いて導いたので、ますますその数を増し、人々の尊敬を高めるようになった。ところがある日「今夜は客があるから決して来てはならない」と厳しく申

し渡された。若者たちは不思議に思ってそっとその様子をのぞきに行った。驚いたことには、老人は天狗たちを集めて酒盛りをしていた。若者たちは腰を抜かささんばかりに逃げ帰ったが、その翌朝からは老人の姿は全く見られなかった。そして、ただ高越大権現のお札と大スギの絵をかいた1枚の板片が置き捨ててあったという。

香川県には、高越大権現の信者が多いということである。このスギを別名天狗スギともいう。



高越神社の大スギ



## 72 山崎八幡神社の大イチョウ

宮島89番地

山崎八幡神社境内の北東のすみに樹齢数百年を経ていると思われる大イチョウがある。目の高さで、周囲 5.7㍍、1の枝までの高さは4㍍あり、枝のつけ根から気根が垂れ下っている。

背丈は約25㍍あり、ほうきをさかさまにしたような形がひときわ高く抜きん出て、遠方からもよく見える。葉は11月下旬に黄色く色づき、初霜がくると一斉に落葉するさまは見事である。

明治29年（1896）に、この八幡神社の境内に山崎小学校（3教室）が新築されて以来、昭和13年3月までの42年間、山崎の子どもたちはこの大イチョウの木の下で育ってきたのである。



山崎八幡神社の大イチョウ



昭和46年1月15日発行

山川町の文化財

限定出版 1,500部

編集 徳島県麻植郡山川町  
発行 山川町文化財編集委員会

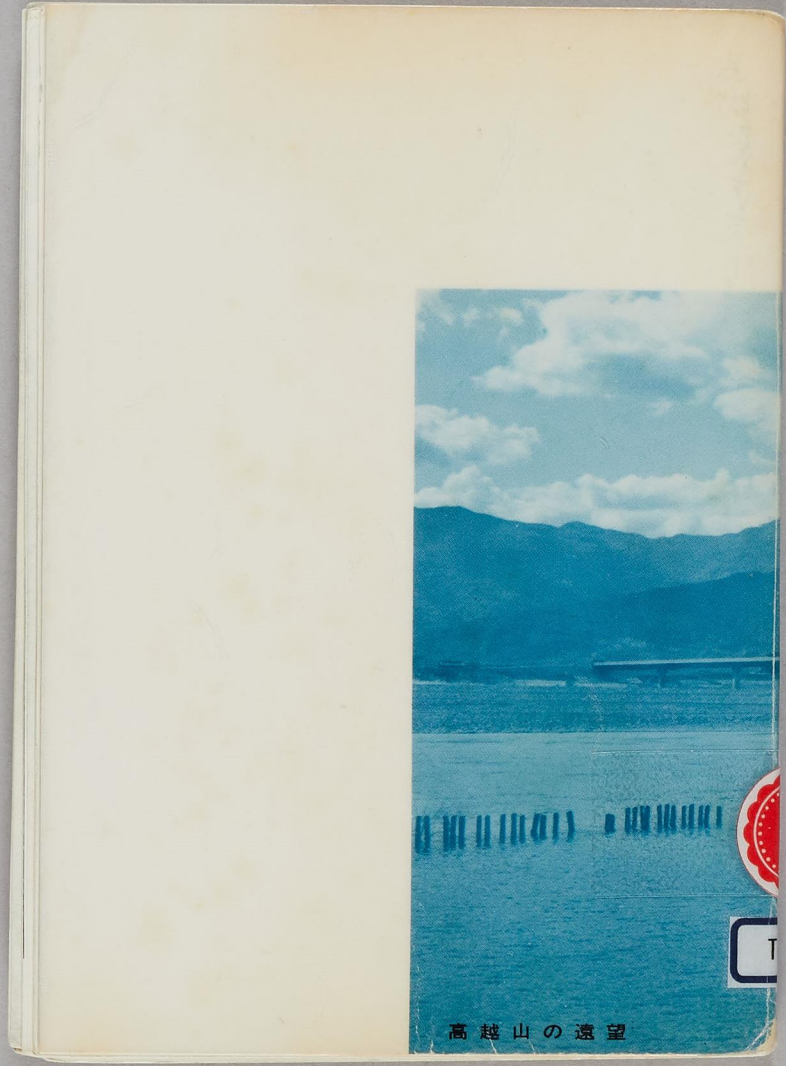
印刷 株式会社出版(徳島・幸町1)



# 山川町文化財 分布図







高越山の遠望